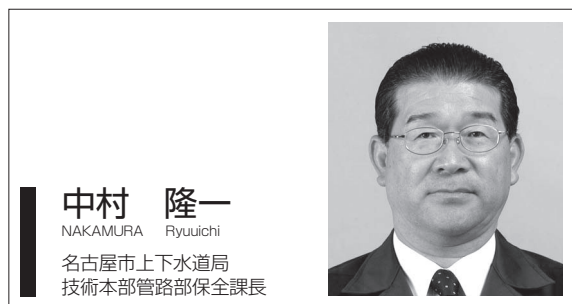


名古屋市の管路施設の 維持管理の歴史と現状および今後の展望



1. はじめに

名古屋市の下水道は、大正元年に供用開始以来90年以上にわたり整備を進めてきた。平成20年度末での管きょ延長は約7,575km、人口普及率は約98.6%に達している。このうち、耐用年数と言われる50年を超えるような管きょについては、平成20年度末現在で約1,010km、全管きょ延長の約13%を占めている。また、30～50年経過した管きょは約2,600kmで約34%である。(図-1)

以下に本市における管路施設の建設の変遷や維持管理の現状および今後の展望を述べる。

2. 下水管路施設構築の変遷

名古屋市の下水道は、1908年(明治41年)から工事に着手しているが、当時は茂庭忠次郎博士の指導で製造された、コンクリート管(手詰め管と呼ばれる継手のない管きょ)を採用していた。コンクリート管の構造の特性は、型枠に鉄筋を入れコンクリートを打ち込んだもので、通常「手詰め管」と呼ばれヒューム管に比べ強度が低く、継手が突合わせ型になっているものである。こうしたコンクリート管は、1937年(昭和12年)から本市の標準構造図に記載されており、ヒューム管を採用する1954年度(昭和29年)ごろまで使用されていた。平成20年度末現在で、このコン

